

私のふるさと

中谷宇吉郎

青空文庫

私のふるさとは、石川県の片山津という温泉地である。柴山^{しばやま}潟^{がた}という湖のほとりにあって、私の子供のころは、まだ淋しい湖畔の小さい温泉地であつた。

この潟^{かた}にはあしが一面に生えていて、ばんという黒い水鳥が、たくさん棲んでいた。泉鏡花の小説にも出てくるが、このばんという鳥は、何となくこの世ばなれをした感じを与える鳥である。女のたましいを思わすような眼をしている。それも玄人風な女である。

温泉地であるから、毎晩のように三味線の音や女の唄声などが、宿屋の明るい窓を洩れて、暗い湖の面^{おも}に消えていくというような風情があつた。もつともその頃はまだ電灯のなかつた頃で、街は暗く、それにひどい田舎の温泉地のことであるから、色つぽいところがあつたといつても、きわめて素朴なものであつた。

北陸地方のことであるから、冬になると、よく雪やみぞれをまじえた強い風が吹いた。そういう時は、温泉宿にもほとんど客がなく、湖がまるで海のように荒れた。その浪音が、床の中までひびき、枕もとのランプの小さい火がゆらゆらと動いた。戸じまりの悪い田舎の家は、いろいろなところが、がたがたと鳴った。

そういう晩は、私と弟は、祖母の床にもぐり込み、その両わきにびつたりと身をよせて

ねた。祖母は、天狗の話だの、海坊主の話だのをよくしてくれた。近くのどこそこの子供が天狗にさらわれたり、隣り村の何兵衛さんが、今夜のような晩に、潟へ出ていて、海坊主に遇ったりした話である。祖母の若い時代には、そういうものが、この湖のほとりには実際にいたのである。

小学校へはいると同時に、私はこの土地を離れたので、温泉地の姿そのものの印象はうすい。私のふるさととは、この祖母の話の中に一番多く生きているようである。

（昭和二十六年五月放送）

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎集 第六卷」岩波書店

2001（平成13）年3月5日第1刷発行

底本の親本：「イグアノドンの唄」文藝春秋新社

1952（昭和27）年12月5日

入力：kompass

校正：砂場清隆

2015年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

私のふるさと

中谷宇吉郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>